

柔道における中・高・大一貫教育による心理的競技能力の変遷について

Transition of psychological game ability of junior high school, high school, and university in judo by consistent education.

斉藤 仁*, 山内直人*, 木村昌彦**, 正木嘉美***
篠原信一***, 大関貴久****, 末成雅子*****, 中村一成*****

Hitoshi SAITO *, Naoto YAMAUCHI *, Masahiko KIMURA **
Yoshimi MASAKI ***, Shinichi SHINOHARA ***, Takahisa OZEKI ****
Masako SUENARI ***** and Kazunari NAKAMURA *****

ABSTRACT

The psychology characteristic of the university judo part, the high school judo part, and the junior high school judo part of this learning won the championship in the nationwide rally victory in fiscal year 2003 is investigated in this research. It aimed to find the feature of the transition on the psychology side by the judo consistent education of the only junior high school, high school, university of Japan, and to become one index to promote the player who passed to the world, and psychology was investigated. The result is as follows.

(1) It was clarified to the junior high school student, the high school student, and the university student that the volition to the game was both high.

(2) The university student was clarified when the psyche of the profile according to the factor was stabilized and concentrated compared with another and it was clarified to the significance that it was high. It was suggested that the mental training and the confirmation of the self be important from this.

(3) It was clarified that there were psychologically no significant differences in the junior high school student and the high school student who was spending the same life. It is possible that the psychology side influences it from this thing by the life cycle boundary.

(4) The problem is seen to be improved in the university student who receives a consistent education for low the relaxation ability and the self-control ability assumed to be a problem in all-Japan judo.

* 国士舘大学 (Kokushikan University)

** 横浜国立大学 (Yokohama National University)

*** 天理大学 (Tenri University)

**** 東日本国際大学 (Higashi Nippon International University)

***** 横浜国立大学大学院 (Yokohama National University Graduate School)

***** 防衛大学校 (National Defense Academy)

I. はじめに

現在、教育の現場において一貫教育に注目が集まっている。そんな中、公立学校における中高一貫教育での選択性導入の先取りを行った宮崎県立五ヶ瀬中・高等学校は建学理念の具体化のために、環境と人間をテーマとした新教科・科目を設けている。これらの新教科・科目では総合的な学習で知識、能力、態度を伸ばすことがねらいとされている²⁾。また体力面においても外部進学者より内部進学者のほうが有意に高い傾向にあるという。その理由としては長期間の受験体制による運動不足や、自己の進路方向の明確さが関係していると挙げられている³⁾。このように一貫教育は知識や体力面から見ても重要であることがわかる。

スポーツの世界においても、平成12年9月文部省（現：文部科学省）から「スポーツ振興基本計画」が告示された。その中に日本スポーツの競技力向上がうたわれ、その施策としてスポーツ一貫指導システムの構築を早急に促している。従来の指導体制だと、小学校・中学校・高等学校・大学・社会人と指導体制が段階的に遮断されるケースが多く、日本の競技力向上のためにも継続的な連携による、組織的かつ体系的な指導システムが必要とされている。スポーツ振興基本計画を受けて、各スポーツ団体が積極的に一貫指導システムの構築のためにプロジェクトを行っているが、あまり進んでいない。柔道に関しても九州を中心にプロジェクトが展開しているが、地区のジュニア強化体制のレベルに留まっているのが現状である。

このような状況の中、本学では1988年以来、学園およびスポーツ面において、中・高・大の一貫教育を行っており、人間教育と競技力向上のために、一貫教育にのっとり10年計画として世界に通用する選手の育成に尽力を注いできた。そして現在では、ユニバーシアード柔道競技大会の優勝者や世界柔道選手権大会の優勝者を輩出してきている。さらに、現在では中学生以下の少年柔道教育

も始め、更なる一貫教育での選手育成を行っている。全日本柔道連盟強化委員会（以下、全柔連とする）においても、中・高等学校生の有望な選手を召集し、世界大会で勝つために強化合宿を行っているが、本学の一貫指導システムは最先端を実行していると考えられる。

一貫指導システムにおける利点は長期的視野にたつて、指導が行え、施設や指導者が統一し指導方針にも、世界を視野においた指導を行える事にある。目先の勝利にこだわらず、長期展望に立つ事で技術的、体力的な強化・向上が望める。その一方で、若年時から同じ環境、同じ指導を受ける事による、心理的側面での特徴にも目を向ける必要がある。スポーツ生活が類似化することで、集団の中での人間関係や思春期時に関わる様々な要因でのスポーツトランスファー、ドロップアウトあるいはバーンアウトなどの諸問題が複雑に絡み合ってくると考えられる。

一貫指導システムを有機的に行うためにも、このような心理的側面での健康状況や競技への意欲などが、一貫指導システムを通して実際にどのように変化しているのかを明らかにする必要があると考えられる。競技選手の心理特性や、思春期時の心理的側面での健康状況や心理的競技能力の研究については、先行研究が数多くあるが、中・高・大の一貫指導システムを受けてきた競技者の心理的競技能力を明らかにした報告はなされていないのが現状である。

II. 目的

本研究では2003年度全日本学生優勝大会で優勝した本学大学柔道部、同年度インターハイ柔道競技大会で優勝した本学高校柔道部、同年度全国中学校柔道競技大会に優勝した本学中学校柔道部における心理特性を調査し、中・高・大の柔道一貫教育が選手の心理的側面に与える影響を明らかにし、世界に通用する選手を育成するための一指標となることを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 心理テスト

本研究では、徳永⁴⁾らが作成した心理的競技能力診断検査 (DIPCA.3, 中学生～成人用) を用いて調査を行った。この心理テストは回答方法についての説明書が添付され、回答方法も○をつけるだけで誰にでも簡単に行えるという長所がある。また結果も5項目の因子別プロフィール (競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性) と12項目の尺度別プロフィール (忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性) が得られ、選手の心理状態を把握しやすいテストである。よって本研究ではこの心理テストを用いた。

②対象者

本学の中学校柔道部26名 (13.8±0.8歳) と高等学校柔道部員29名 (17.1±0.9歳)、同高校を卒業の大学柔道部員26名 (20.5±1.2) の計81名を対象とした。

Ⅳ. 結 果

1. 因子別プロフィールにおける中学校・高等学校・大学の比較

(1) 第一因子、競技意欲についての比較

図-1 は本学中学・高校・大学柔道部における因子別プロフィール競技意欲の比較を示したものである。中学 (67.12±8.26) と高校 (62.90±11.82) と大学 (66.85±15.54) では統計的に有意な差は認められなかった。

①忍耐力

図-2 は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール忍耐力の比較を示したものである。中学 (14.77±2.66) と高校 (14.52±3.49) と大学 (16.31±4.07) では統計的に有意な差は認められなかった。

②闘争心

図-3 は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール闘争心の比較を示したものである。中学 (17.12±3.53) と高校 (15.76±4.41) と大学 (16.92±4.64) では統計的に有意な差は認められなかった。

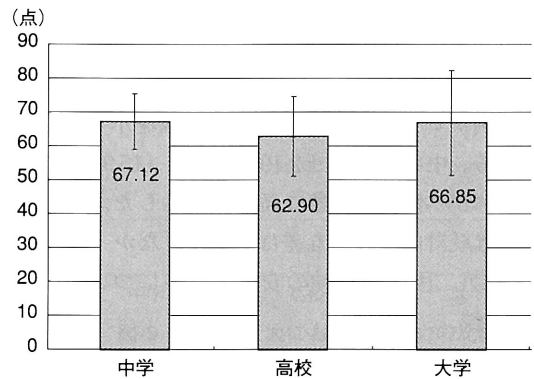


図-1 中・高・大における競技意欲の比較

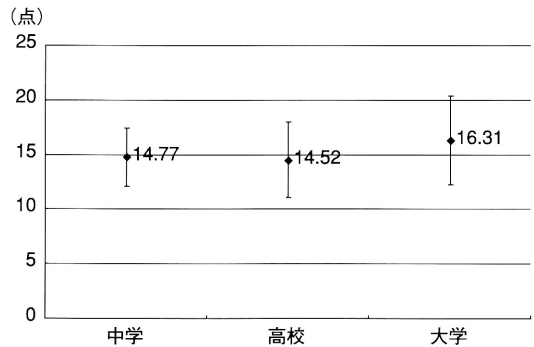


図-2 中・高・大における忍耐力の比較

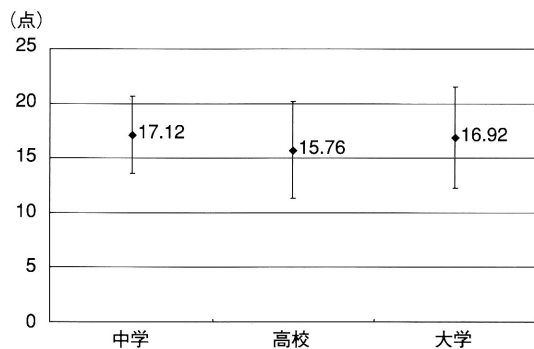


図-3 中・高・大における闘争心の比較

められなかった。

③自己実現意欲

図-4は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール自己実現意欲の比較を示したものである。中学(18.00±2.18)と高校(16.71±3.17)と大学(17.58±3.67)では統計的に有意な差は認められなかった。

④勝利意欲

図-5は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール勝利意欲の比較を示したものである。中学(17.23±2.19)は高校(15.90±2.76)と比べ5%水準で有意に高い値を示した。それ以外では統計的に有意な差は認められなかった。

(2)第二因子、精神の安定・集中についての比較

図-6は本学中学・高校・大学柔道部における因子別プロフィール精神の安定・集中の比較を示したものである。中学(37.46±10.61)は大学(47.81±10.54)と比べ0.1%水準で有意に低い値を示した。また高校(40.00±10.44)は大学(47.81±10.54)と比べ1%水準で有意に低い値を示した。

①自己コントロール能力

図-7は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール自己コントロール能力の比較を示したものである。中学(12.77±3.69)は大学(16.54±3.08)と比べ0.1%水準で有意に低い値を示した。また高校(13.59±3.86)は大学

(16.54±3.08)と比べ1%水準で有意に低い値を示した。それ以外では統計的に有意な差は認められなかった。

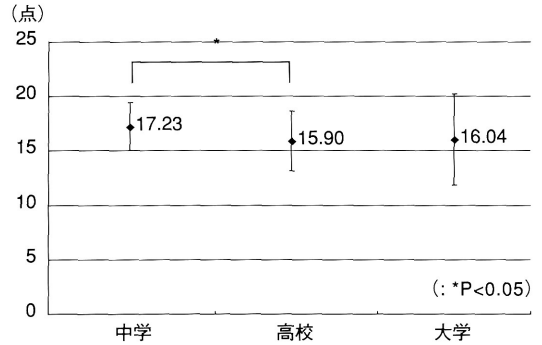


図-5 中・高・大における勝利意欲の比較

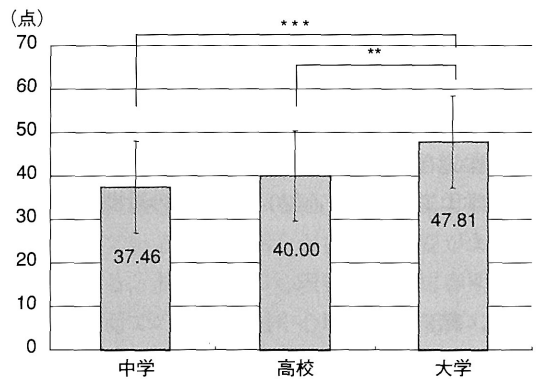


図-6 中・高・大における精神の安定・集中の比較
(:** P<0.01)
(:*** P<0.001)

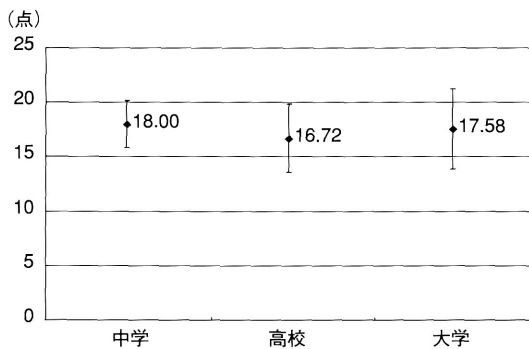


図-4 中・高・大における自己実現意欲の比較

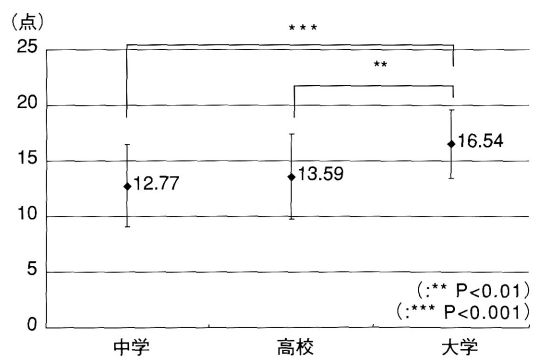


図-7 中・高・大における自己コントロール能力の比較

②リラックス能力

図-8は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィールリラックス能力の比較を示したものである。大学(14.81±5.04)は中学(11.23±3.40)と比べ1%水準で有意に高い値を示した。また大学(14.81±5.04)は高校(11.17±4.46)と比べ1%水準で有意に高い値を示した。それ以外では統計的に有意な差は認められなかった。

③集中力

図-9は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール集中力の比較を示したものである。中学(13.46±4.48)は大学(16.46±4.22)と比べ5%水準で有意に低い値を示した。それ以外では統計的に有意な差は認められなかった。

(3) 第三因子、自信についての比較

図-10は本学中学・高校・大学柔道部における因子別プロフィール自信の比較を示したものである。中学(25.23±6.49)は大学(29.88±9.81)と比べ5%水準で有意に低い値を示した。それ以外では統計的に有意な差は認められなかった。

①自信

図-11は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール自信の比較を示したものである。中学(12.58±3.66)と高校(12.45±4.57)と大学(14.81±4.63)では統計的に有意な差は認められなかった。

②決断力

図-12は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール決断力の比較を示したものである。中学(12.65±3.35)と高校(12.76±4.06)

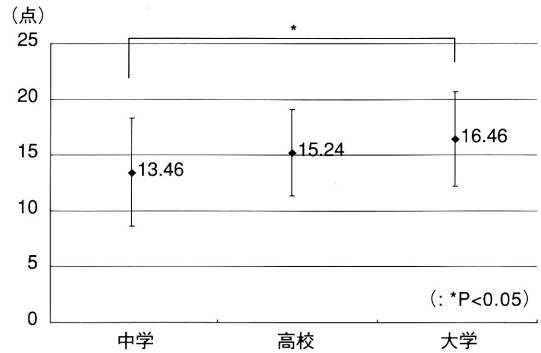


図-9 中・高・大における集中力の比較

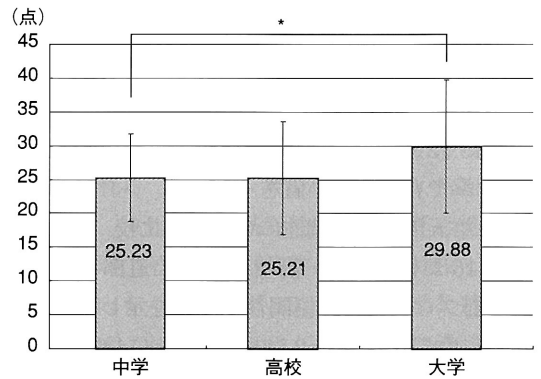


図-10 中・高・大における自信の比較

(: *P<0.05)

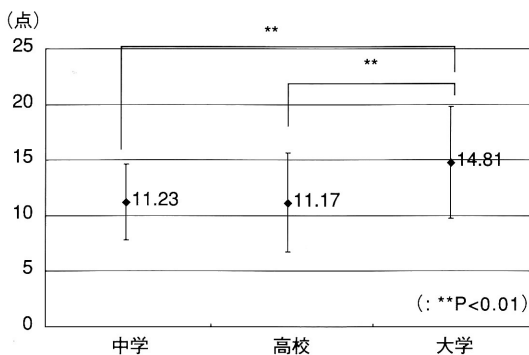


図-8 中・高・大におけるリラックス能力の比較

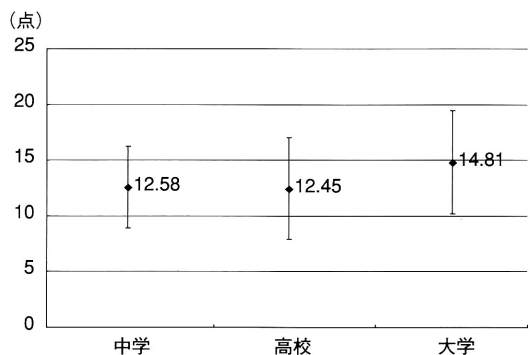


図-11 中・高・大における自信の比較

と大学 (15.08±5.31) では統計的に有意な差は認められなかった。

(4) 第四因子、作戦能力についての比較

図-13は本学中学・高校・大学柔道部における因子別プロフィール作戦能力の比較を示したものである。中学 (24.85±6.65) は大学 (29.77±10.41) と比べ有意に低い値を示した。また高校 (23.66±8.51) は大学 (29.77±10.41) と比べ有意に低い値を示した。

①予測力

図-14は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール予測力の比較を示したものである。高校 (11.69±4.04) は大学 (14.65±5.22) と比べ5%水準で有意に低い値を示した。それ以外では統計的に有意な差は認められなかった。

②判断力

図-15は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール判断力の比較を示したものである。大学 (15.12±5.22) は中学 (12.46±3.28) と比べ5%水準で有意に高い値を示した。また大学 (15.12±5.22) は高校 (11.97±4.04) と比べ5%水準で有意に高い値を示した。

(5) 第五因子、協調性についての比較

図-16は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール協調性の比較を示したものである。中学 (17.46±2.58) は高校 (14.69±4.47) と比べ1%水準で有意に高い値を示した。しかし

中学 (17.46±2.58) は大学 (18.31±3.42) と比べ1%水準で有意に低い値を示した。

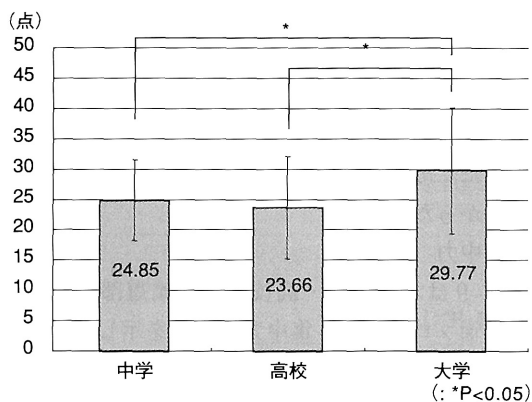


図-13 中・高・大における作戦能力の比較

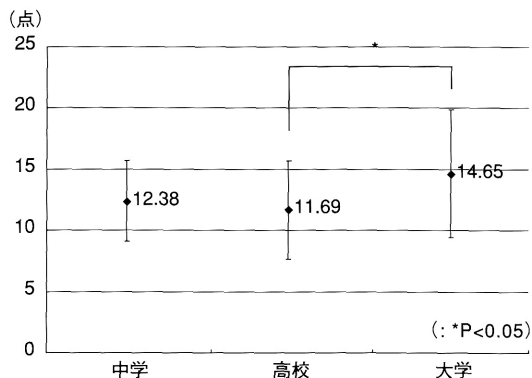


図-14 中・高・大における予測力の比較

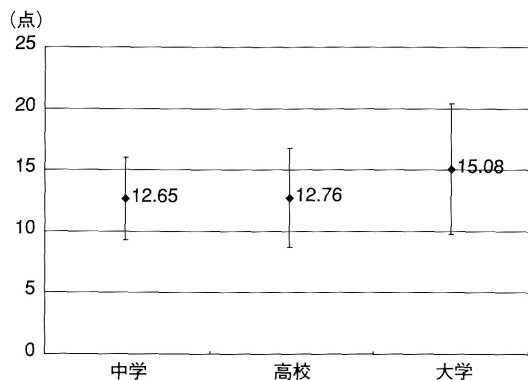


図-12 中・高・大における決断力の比較

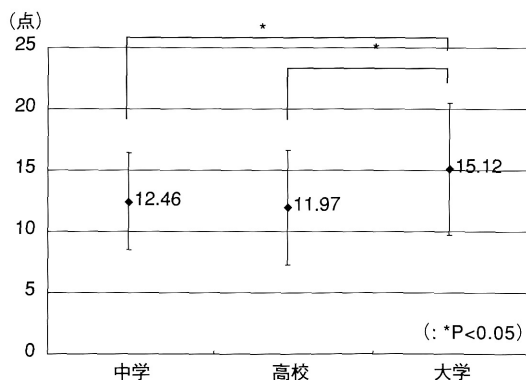


図-15 中・高・大における判断力の比較

2. 尺度別プロフィール全体の平均値

図-17は本学中学・高校・大学柔道部における尺度別プロフィール全体の比較を示したものである。平均値において差が大きかったのは自己コントロール能力やリラックス能力や判断力であった。また差が小さかったのは闘争心や自己実現意欲であった。

IV. 考 察

因子別プロフィールの第一因子、競技意欲を全体で見ると中・高・大において顕著な差は見られない(図-1)。しかしながら、尺度別プロフィール

における忍耐力・闘争心・自己実現意欲では中・高・大での差は見られなかったが(図-2, 3, 4)、勝利意欲では中学が高い傾向を示した(図-5)。本学の柔道部は、中学、高校、大学の全ての段階において、全国大会の優勝候補になっているが、その中でも中学校の全国大会への出場資格が困難なため、中学が勝利に対する意欲が多少高いのだと思われる。

また因子別プロフィールの第2因子、精神の安定・集中においても大学が有意に高い値が得られたが、各項目で有意な差が得られているためと思われる(図-6)。尺度別プロフィールにおける自己コントロール能力・リラックス能力・集中力では大学が有意に高かった。(図-7, 8, 9)、現在、中学、高校ではメンタルトレーニングを行っていない。しかし大学では自己コントロールやリラックスの向上を目的にメンタルトレーニングを行っている。そのため、大学柔道部が有意に高かったと考えられる。

また決断力も因子別プロフィールに分類すると自信に属するため決断力も同様の結果が得られたと考えられる(図-10)。尺度別プロフィールにおける自信、決断力では統計的に有意な差は見られなかったが、平均値では大学が中学、高校と比べて高い傾向を示した(図-11, 12)。本学柔道部は中・高・大それぞれのカテゴリーで常に優勝候補とされている。そのため、自信において有意な差が得られなかったと思われる。

因子別プロフィールの作戦能力においては、中学は大学と比べ有意に低い値を示した。また高校は大学と比べ有意に低い値を示した。このことは、尺度別プロフィールにおける予測力・判断力では大学は中学、高校と比べて有意に高かった。(図-14, 15)

因子別、尺度別プロフィールにおける協調性においては高校>中学>大学の順で高くなる傾向が得られた(図-16)。中学では主に団体戦を重視している傾向にある。しかし高校になると、個人戦も大きく取り上げられるようになり、個人戦にも

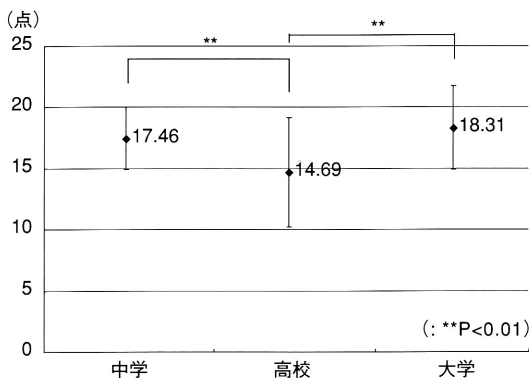


図-16 中・高・大における協調性の比較

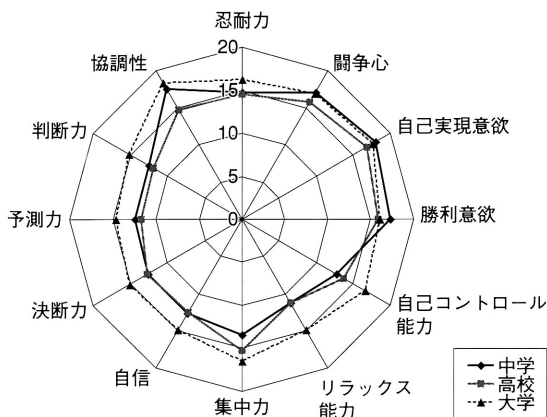


図-17 中・高・大における尺度別プロフィール全体の比較

力を注いでいる。そのため中学から高校にかけて低くなったのではないと思われる。しかし大学では団体戦に重点を置く傾向があり、練習方法も団体戦を意識した練習を行っている。そのため、協調性が増加したと思われる。

尺度別プロフィールにおける中・高・大における全体の比較より(図-17)、中学と高校は協調性のみには有意な差が見られたもののその他の項目では有意な差は認められなかった。このことより中学と高校では同様の傾向にあることが推測できる。現在、中学と高校は部員全員が同じ寮で生活し、同じ道場で練習を行っている。そのため、生活のリズムや柔道に関する指導方法が同様である。そのために中学と高校が類似した心理傾向になったと思われる。心理特性は競技による特性も表れるが、環境によっても変化が表れるのではないと思われる。一方、大学柔道部ではそれを土台とし、さらにメンタルトレーニングを行っている。そのために自己コントロール能力、リラックス能力や集中力が有意に高くなったと思われる。またメンタルノートによる自己の確認や、細かい研究により自信・決断力・予測力・判断力においても高い値が得られたと思われる。

中学・高校では、先行研究で言われている柔道選手の心理特性として挙げられている、勝利意欲が高く、自己コントロール能力、リラックス能力が低いという同じ傾向が見られた⁵⁾。しかし、問題点とされていたその傾向が大学では向上が見られた。

V. ま と め

本研究では2003年度全日本学生優勝大会で優勝した本学大学柔道部、同年度インターハイ柔道競技大会で優勝した本学高校柔道部、同年度全国中学校柔道競技大会に優勝した本学中学校柔道部における心理特性を調査し、日本唯一の中・高・大の柔道一貫教育による心理面の変遷の特徴を見い

だし、世界に通用する選手を育成するための一指標となることを目的とし、心理調査を行った。

結果は以下の通りである。

- (1) 中・高・大ともに競技に対する意欲は高いことが分かった。
- (2) 因子別プロフィールの精神の安定・集中において大学が有意に高いことがわかった。これによりメンタルトレーニングや自己の確認が重要であることが示唆された。
- (3) 同じ生活を過ごしている中学・高校では心理的に有意な差がないことが分かった。これにより環境が心理に影響を及ぼすことが考えられる。
- (4) 全日本柔道において課題とされていた、リラックス能力・自己コントロール能力が低いことに関して、一貫教育を受けた大学生においては課題が改善されていることが見受けられている。

以上より柔道一貫教育において世界に通用する選手を育成するために、中学・高校で見られた全日本柔道と同様の傾向を改善していくことが必要であると思われる。

引用・参考文献

- 1) 疋田啓吉・谷村辰巳「一貫教育における体力について—内部進学者と外部進学者—」日本体育学会大会号1973, Vol. Num. 24 pp.390
- 2) 準備委員会企画シンポジウム6「総合的な学習で伸ばす知識、能力、態度は何か?—総合的な学習と心理学の接点を探る—」日本心理学会発表論文集2000, 39:14-15
- 3) 笹島恒輔「一貫教育と体育(その三)高等学校以下の体格並に大学の後期運動能力について」体育学研究1957, Vol. Num.27 pp.27-30
- 4) 徳永幹雄・橋本公雄: 心理的競技能力診断検査—手引き—, トーヨーフィジカル発行
- 5) 徳永幹雄・細川伸二・西田孝宏・高橋幸治・小野沢弘史・村松成司「全日本柔道連盟強化選手の心理的競技能力に関する研究」柔道科学研究, 3:9-21, 1995